
不在小説

並盛りライス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

不在小説

【Nコード】

N7479B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

この三つの小説は、どれも不在をテーマにした小説です。喪失感やそこに存在しない誰かの存在を感じてみてください。

第一話「二人の家」

梅の咲き誇る小路を歩くと、微かに香りが漂っている。一杯に吸い込むには、贅沢過ぎて、僕はバツクバツクを背負い直す。

仰々しい桜の美しさよりも、慎ましい梅を好むのも僕だけではないはずだ。

梅の小路は長くは続かず何処かで見たような廃屋がそのままの姿で、そこに放置されていた。

人間の作り出した文化であるその小屋が、結局は自然と同じである事を思い知らされる。

苔がみっしりと覆い、蔦が護るように小屋を包む。塞き止められた何億年が僕の目の前で放たれる。文明崩壊と自然復古の姿。

僕は、そのあばら屋を記憶の隅で帰る家として記したのだ。二人が冬を越した記録であり、キミの迎えなかった春の象徴である。

キミの墓標。僕の道標。キミは今でも、春の眠りの中でまどろみ、夢を見続けるのだろうか。

湿気は思ったよりも浸透していない。それはよく日の当たる、この小屋の特性であった。春の陽気は穏やかで、僕の心も幾分か静まっていた。

しかし、ふと何かを思いだそうとすると、深い溝に思考が落ち込んでしまいそうになった。それを現実に繋ぎ止めたのも、やはりキミの残した、この墓標のおかげかもしれない。

少し早めに咲いたタンポポの花が僕を迷わずに生かした。記憶は、色が、時が経つほど鮮明に鮮やかになるけれど、キミの顔は反対に朧げになる。

ポケットの中に摘めた小さな名もなき花の種を小屋の周囲に蒔いた。時がくればやがて、この小屋は形を失なう。だが次に、この小屋を訪れたなら、名もなき花達が僕を迎えてくれるかもしれない。形ある物は全て時の流れの中で失われる、と誰かは言ったけれど、

たとえ曖昧な記憶になっても、忘れることのできない出来事もある。散文は静止している。そこは時が停まっているかのように緩やかに時間が流れている。

「おかえり」

真っ白い髪は艶やかな光沢を放ち、ブラウンの瞳があの時を留めて僕を射る。

僕は咳く。もう戻らない時の中で、闇が君を投影する。

「ただいま」

すぐ側に、君を感じていた。手を伸ばしたら、そこは、ただの何もない空間だった。

第二話「水中献花」

炭酸の抜けたコーラによく似た、紅色の夕焼けが湖に空を投影する。気泡を吐き出して、右から左へ金魚が游いだ。

湖は背景である。ここはホテルの一室で、中央に厚いガラスによって切り取られた空がある。

金魚は丸々と、醜く太っており、ぐるりと部屋を見渡した。

床には、赤い絨毯が敷かれていて、滲んで水浸しになっていた。

髪からまだ水が滴っているというのに、彼女は平気で浴室から出てきた。

私はとても、喉が渴いていたが、手近な所に飲み水はない。そろそろ夕日が沈んでしまふ。そのたった数秒が、数千年のように長く感じる。

浴室から白い湯気が溢れている。彼女の体温が、この部屋を満たす。

彼女の小さな手が、私に向かって伸ばされた。私はその体を抱き上げる。

彼女は、服が濡れる事などに気にしていない。首に手を回して、高い位置から世界を見渡してみる。

夕日は沈んでしまつて、空との境目が意味を成さなくなる。ただの闇が海を侵食していく。

太った金魚が窮屈そうに闇の中を旋回する。

幼い彼女の眼が、何かを探す。足をバタバタしながら、宙で踊る。私が見やがみこむと、少し名残り惜しそうに手を離れた。

「パパはどこ？」

永遠の一秒が過ぎた。私はただ、首を振って彼女を強く抱きしめた。

二度と離れないように、その形を確かめるみたいに、強く。備え付けのデジタルクロックが、黙々と時を刻んでいる。

彼女に、向日葵柄のサンドレスを着せて私達は部屋を出た。

吹き抜けのエントランスを通りすぎて、回転扉を押し開ける。

二ヶ月ぶりに吸い込んだ外の空気には、潮の香りが漂っていた。

花屋で買った献花を水色バケツに入れて、私は海へ続く短い石段をゆっくり歩いた。

手に握った彼女の手が汗ばむ位に、蒸し暑い夜だ。海は静寂そのもので、恐怖などとは無縁だった。彼女は賢い。もう何もかも、気付いていて、黙ったままだ。

私が、あのホテルの中に幽閉されている間に、すっかり大人びている様にも見える。

唇の柔らかい、とんがり具合いや、スラっとした手足の白さも、私の手の中からすっかり放たれていて、まるで、私の方が彼女を手離さないように強く握っているようだ。

ふわりと夜風が舞い上げた空気の束が私と彼女の肩を撫でると、目の前に海が現れた。

不思議と、悲しみよりも気持ちが高ぶっている気がした。

夏祭りの後の、花火みたいな彼の最期を、この水をくぐる献花が見届ける。

異国の海はいつまでも静かだった。私は彼女の父親を眼で探している。

「一緒に行ければ良かったのに」

おもわず洩れた言葉の意味が何時までも戻ってくる献花みたいに宙に浮いている。

でも私達は、彼を見つける事なんてできなかった。そんな事は、出来っこなかった。

第三話「シネマ」

唐突に視界が開けた、其処は待合い室の様な所で、たぶん小さな映画館だった。

君は確か、片方の目にゴミが入ったとかで、手洗いに向かったのだ。

映画は、もうすぐ始まるのだけれども、君は戻ってこない。

今は予告が流れているようだ。正直に言つと、それが何の映画だったのか、思い出せない。

煙草を吸いたいという欲求が、さつきから頭の隅の方で主張している。

生憎、ライターを持っていない。映画が始まる。君は戻ってこない。

幾分か、煙草を吸いたいという欲求が薄れていて、ただイライラしていた。

空気が湿っぽい吐息を吐き出して、小さな映画館の待合い室はやかに肌寒かった。

気温が下がったのは、雨が降り出したからだだった。ポツポツとガラス窓を叩く音はリズムもテンポも狂っている。

どれぐらい時間が経っただろうか。君が手洗いに立ってから、僕が産まれてから、地球が産まれてから……。

時間の感覚は狂っている。いつまでも君は帰らない。

ずっと昔に、両親とはぐれて迷子になった時に抱いた妙な不安感に似ていた。

今すぐにも、君がその角を曲がって来て、謝りながら現れるのではないかと思う反面、もう二度と彼女が現れないのではないかと思っている自分がある。

そして僕は立ち上がった。長い一分が過ぎて、僕は映画館の白い角を曲がった。

そこは、不気味なくらいに白い突き当たりの壁だった。お手洗い自体がこの映画館には無いのだ。

僕は暫くの間、その病的に白い壁をじっと睨んでいたが、やがて本当に途方に暮れ額を押し付け、その壁に寄りかかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479b/>

不在小説

2009年7月3日19時01分発行